

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年
2月号
通巻606号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



畑仕事中の法主様(昭和52年)

『アサヒグラフ』の取材時、未掲載だった写真

再録 昭和41(1966)年5月23日発行『大倭新聞』第21号より

対談 日本とはなにか 〈下〉 前編

鶴見俊輔氏(43歳)×法主 矢追日聖(54歳)

日本人の可能性

鶴見俊輔 F I W CのFはキリスト教一派のフレンズ(キリスト友会)、クエーカーのことです。でも、フレンズのFはキリスト教だから、ここ紫陽花邑では捨てる、とは言いませんね。

法主 あつてもいいですよ。

鶴見 F I W Cをここで活動させる精神のあり方が面白いんです。日本が朝鮮とか中国へ行って、イギリスによる支配を排除した後、イギリス人の資本家と同じようなやり口で朝鮮人や中国人を搾取する。そうしない精神のあり方です。

中国人には中国人がもうかるように働いてもらって、日本人の信仰は押し付けられない。私たちはこういう言い伝えで育ち、このように思ってますよ、ということを知ってもらう。そして向こうから大いに学ぶ。事実、既に儒教も仏教も学んでますがね。そうしたやり方だったら、別の可能性が開けた、と思います。

法主 感覚ではそれが正しいと思いますね。F I W Cの場合でも、Fが付いているんですよ。キャンパーの中に、何人フレンズの信者がいるかというところ……。

鶴見 1人しかおりません(笑)。学生が面白いですね。Fを取って主張しないところが。

法主 全員フレンズの信者でもないと思うんです。そんなカチカチのクリスチャンが、社会復帰のセミナーセンターの仕事をしてほしい、と言ってきたと仮定

しますね。それでも、ここは私が使わせていい土地ですから、やりなさいって言いますよ。それが神道的な流れ、考え方がわかりませんけど。

相談されたら、自分がその相談事の中へ入り込んでしまう。この人たちがやってくれないければ、私がしていた仕事かもしれない。ない力を振り絞ってね。だから私はできるだけ協力はしますけれど、F I W Cの人たちが代わりにやってくれるのは、結構だなとも思うんです。

鶴見 良い事はすべて良い、という方向へ引き寄せられてゆくのが本当の宗教です。もし、このF I W Cの人たちがガンガンのキリスト教徒だけの集団であつたら、もつと面白いですよ。

法主 そうですか。

鶴見 キリスト教徒が、神道のあるべき形になると思います。というのは、「交流の家」の起源になった、変な話がありましてね。

ギリシャ正教のロシア人が、東京YMCA(キリスト教青年会)の宿泊予約を一方的に取り消されました。帝政ロシアの移民で公爵の息子です。そのロシア人が園長から無菌の証明をもらって来ていると掛け合っても、ダメだと突っぱねる。向こうの言い分は、他の宿泊者が菌をうつされると思っけ気持悪がるだろう、だった。

宿泊を拒否されたロシア人は「その気持ち良いようにする」という行為が、間違つた根拠に基づいていて、その結果一人の人間が苦しんだらどうなるのか?と抗議しました。イエスのたとえで言う、^{※1}99匹と1匹です。聖書では、必ずその1匹を助けなきゃならないことになってますから。

そしたら「いや、そうじゃありません。99匹、つまり多数のほうが正しい教えた」って答えた。帝国ホテルと同じ原理なんです。東京YMCAの経営方針が。^{(※1…所有する羊100匹のうち1匹}

を見失つたら、持ち主は99匹を荒野に残して探しに出かけ、見つければ大喜びするに違いない。それと同様に、罪人が1人でも悔い改めるなら、悔い改める必要のない99人に勝る喜びが天にある、という説話。新約聖書Ⅱルカによる福音書「見失つた羊」または「いなくなつた羊」のたとえより)

結局、そのロシア人は、キリスト教の集団から締め出されてしまいました。こんな状況でも受け入れてくれる先は神道だけです。だから、もしもキリスト教徒の集団が紫陽花邑へ来て、交流の家を作り始めたら、宗教史的に言つて、もつと面白かつたと思います。

開かれた神道

編集部 今のご発言に関連しそうな、この近くのお寺にいる尼さんの話が面白かつたんです。

その尼さんの師匠が残した辞世の句は「悟りなば、坊主になるな、魚とつて毛ものばせ、地獄へ行つて、鬼に負けるな」。その辞世を抱いて、尼さんは西日本をすうつと修行に回りました。ところが、お寺へ行つて「今晚泊めて下さいませんか」と頼むと、断られてしまう。でも神社へ行つて頼むと、必ず泊めてくれたそうです。

「私は、お寺で出家得度してもらい、お寺を頼つて西日本を流浪しましたけれど、本当は神さんに助けてもらいました」と言つておられました。

鶴見 そういう考え方が一つの流れとしてあることはありますね。

例えば1ヶ月前、初めて^{※2}杉山龍丸氏の家を訪ねました。あの人、神道なんです。^{(※2…戦後、私財を投じてインドの砂漠地帯に植林を続け、独自の緑化活動に取り組んだ。国際文化福祉協会会長、旧日本陸軍飛行隊整備隊長。インド独立の父はガン}

ジー、緑の父(グリーン・ファザー)はスギヤマ。現地では敬愛の念を込めてこう呼ばれる。父は作家・夢野久作。祖父は政界の黒幕とも言われた杉山茂丸)部屋に入つたら、ヨハネス(ヨハネ23世)法王の写真が掛かつてる。ヨハネス法王というのは、大変偉い法王(教皇)です。平和へのメッセージを出した。それから、ギリシャ正教との悪い関係を正そうとして、合同の方向へ歩み出した。今の法王(パウロ6世Ⅱ対談当時)も偉いけど、その方向を踏襲している。

「どうして法王の写真掲げているのか」と尋ねたら、「好きなんだ」と答が返ってきました。おじいさんの遺訓が「日本の神道とキリスト教、儒教、イスラム教は尊重しろよ」だったそうです。面白いですね。六、七十年前の遺訓ですよ。そういう開かれた態度を持つている人です。

普通のキリスト教の流れからは想像できないでしょう。杉山氏の書斎にあるのは、ヨハネス法王の写真だけ。神道なのに。びっくりしたなあ。本来の神道というのは、排他的ではないわけですね。法主 清濁併せ飲むところがありますね。

編集部 ゴリゴリの神道信者がいるのも事実ですけど。だから、神道には大きく分けて二つの系統があるような気がします。一つは、今言われた「開かれた神道」。もう一つは「国粹主義的、排外的になつていった神道」。

鶴見 そうですね。後の方が、明治の末期からは主流になりました。権力との関係から言えば、国家の補助を官幣大社などに与えたり、便宜を図りましたからね。そうじゃないのが傍流になつちやうて、政治家で言えば、最後は^{※3}永田秀次郎みたいな人になりますけど。^(※3…戦前・戦中に多数のポストを歴任した政治家、俳人。前号参照)

でもね、その前にもポコポコといるんです。例



平成元年9月24日に柴地さん急逝。
大倭葬で鶴見先生のご弔辞を頂く

えは宇都宮太郎。大正時代の朝鮮軍司令官です。日韓併合の後、万歳事件(三・一運動、1919年)が起こったでしょう。反乱が起こるのも当然ですよ。歴史ある門を壊したり、朝鮮語の使用を禁じたり、ずいぶんひどい事を日本がしました。反乱が起こった時、宇都宮太郎は「朝鮮人に鉄砲を向けるな」と司令をすぐに出しました(※実際にはこの司令を逸脱した行為もあり、鎮圧までに多数の死傷者が出ている)。「朝鮮人を尊重しなきゃいけない。本来、日本人は朝鮮人と結婚した方がよろしい。自分の息子もなるべく朝鮮人と結婚してもらいたい」という遺訓まで残した人です。それを中学1年生の自分の息子に朗読させる。お母さんはとても嫌がったそうですけどね。

その息子というのが、宇都宮徳馬。自民党の代議士ですけど「中国と仲良くしなきゃいけない、朝鮮とは北と南の区別なく仲良くしなきゃいけない。今の自民党の政策は間違っている」と言う。傍流になってますが、面白いと思います。

私は自民党の中でも永田秀次郎とか宇都宮徳馬の流れだったら、一緒にやっつていこうという考え方は。共産党とだけ一緒にやろうとか、いや共

産党と社会党までならいい、とか考えない。自民党に党籍はあっても、非常に信用できる人とだったら、例えば宇都宮徳馬とだったら一緒にやっつていいし、ある限定を置けば、※4 松村謙三、※5 宮澤喜一とだつて一緒にやろうと考えます。(※4:元自民党顧問、衆議院議員。農政畑を歩み、大臣を歴任。日中国交正常化に尽力。清廉・高潔で知られた。※5:旧大蔵省出身の政治家。大臣、自民党総裁を経て1991年に首相。戦後の保守本流と評された)

こんなことを言うと、話が混乱して左翼の人から叱られる。はみ出だしてしまふんです。だけど、共産党のシンパとして文筆業しかやらない人よりも、宇都宮徳馬のほうがよほど信用できます。

今度来日するアメリカの平和運動家の一行に引たつて、※6 福岡へ行く時に、一番我々の足を引っ張ったのは共産党だし、一番助けてくれたのは杉山龍丸氏です。私にとつては杉山氏の方がずっと頼りになりますよ(笑)。(※6:ベトナム戦争に反対する市民団体・通称「ベ平連」が1966年6月に主催した講演会。米国の大学教授と黒人平和運動家を講師に招き、鶴見俊輔氏らが同行して全国を行脚。九州では福岡県の九州大学が会場に選ばれた)

法主 そういうことになりますね。

鶴見 ところが、そう言うと「杉山龍丸は※7 玄洋社と関係がある右翼だから、一緒にやれない」とか怒られる。杉山龍丸氏がどういう人間で、何をしていたかを知ろうとしないんです。(※7:旧福岡藩士らが民権主義を掲げて明治時代に結成した運動団体。杉山龍丸氏の祖父・茂丸も参画した。後に国権主義へ転じて国事に関与。大アジア主義へと進み、中国やインドなどの革命家も支援した。戦後GHQの指令で解散。「ベ平連」メンバーだった頃の龍丸氏) 法主 そういう食わず嫌いの人が多いですね。

固定する進歩派

鶴見 進歩派には多いですね。イカンもんはイカン、と定まっている。だから玄洋社はイカン、アジア主義はイカン、国粋主義はイカン、国家主義はイカン、と言う。

私は否定するのではなく、区別します。杉山龍丸はよろしい。宇都宮徳馬はよろしい。宮澤喜一もある程度よろしい。右翼の思想家でもね。※8 権藤成卿は非常に面白い。こう考えます。(※8:農本自治主義を唱えた思想家。官治資本主義を批判、アジアの農を基盤にした社稷国家の構想が農村出身の軍人らに支持された。海軍青年将校の起こした1932年の五・一五事件に思想的影響を与えたとされる)

法主 それにしても、いいとか悪いとか簡単に決められるのは偉いですね。

鶴見 主張をよく読んで考えてみて、面白ければいいと思うんです。最近読んだ権藤成卿の意見に反対したいこととあまりありませんよ。だけど、権藤成卿はイカン、ということになつてからイカンのでしようかね(笑)。

法主 なんでもイカンと思う人は不幸ですね。そんなにイカンものが世の中にたくさんあったら苦しいですよ(笑)。

鶴見 読んだ上でイカンと言うのなら、まだ話はわかりません。確かにイカンものもある。ところが読んでない。どこがイカンのか、と尋ねたら、黙ってしまう。イカンものはイカンとだけ言つて。

八紘一宇の夢

法主 そんなふうには決め付ける人は多いですよ。戦前、私の考えていた八紘一宇と実際に政府のや

ったことは非常に違っていました。あの頃の詔勅は「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ……」(「日独伊三国条約締結ニ関スル詔書」1940年)です。その精神が本場の八紘一宇だと思えます。

私も同じようなことを言いました。満州には満州の民族神があるだろう。祖先からのね。朝鮮には朝鮮の民族神があるだろう。日本は聖戦と言っていましたけど、心の祭りというか、向こうの心を鎮めることが一番大切なんだから、その土地の人たちが尊敬している民族神をまず初めに祭るべきである。そしてそれに対し日本人が頭を下げて拜む。それが八紘一宇のあり方じゃないか、と。祭政一致ということです。

昭和16年か17年、ある会合の席でした。朝鮮総督として赴任する方に「朝鮮民族が一番尊敬している神さんを京城神宮に祭ったらどうですか」と話したら、叱られましたね。「君、そんなことできるか」と。まあ、軍はそんな調子でした。

台湾の場合でも、日本の統治国だから天照大神を持つていく。これでは侵略神じゃないか、八紘一宇の精神に逆らうんじゃないのか、と意見を言ったら、精神的な弾圧を受けましたね。逮捕はされなかったですけど、しょっちゅう牛込(当時の東京市牛込区)の憲兵などが私の元に来てました。

八紘一宇の理論はいいけど、政府がやってたことは理論に反するような形でしたからね。私の意見とは食い違いました。統治国の人たちは、日本の国威や武力を恐れて帰順はしていても、心では本場に從っていませんでしたもの。やはり、そうじゃないのが日本人の行き方でしょうね。

鶴見「そうじゃない」と言い切れる場合はね(笑)。つまり、思想を押し付けようとする場合、キリスト教、あるいは儒教の考え方のほうが、被害は少なくて済むんです。どちらも民族の違いを

超えた、普遍的な宗教です。だから、あまりにひどい仕打ちを受けた時には「教えの原理に逆らうじゃないか」って誰でも突っ返すことができる。ところがね、天照大神は日本の民族神でしょう。それを朝鮮人とか中国人へ押し付けると、キリスト教よりもっとひどいことになる。

法主 日本の民族神は日本人だから通用するのであって、外国人には通用しませんからね。鶴見 逆に、押し付けなかったらどうなるか。例えば朝鮮、あるいは中国へ行つて、「私たちはこういうことを信じてきました」「こういうふうに生きています」とニコニコ語り、「おい、こう思え」って日本人が命じなきゃどうだろうか。キリスト教の押し付けよりも寛容な、穏やかな共和的関係ができたのではないか。

そういう可能性はあったし、今後もある。そして、その可能性は日本の神道の流れの中から引き出される、という漠然としたカンがあるんですけど、だから、神道はこのようになり得るのではないか、というボンヤリしたカンを裏付けてくれるものに私は興味を持っています。神道関係者でも、葦津珍彦さんは面白いし、山岸会も面白い。大倭教も面白いし、大本も面白いわけですよ。(※9

：左翼運動から転向した尊皇神道家。戦中に反戦活動を行い、戦後はGHQの神社神道に対する圧迫に對抗、神社本庁設立に動いた。天皇制の論客として著名)

紫陽花邑を支えるもの

編集部 ちょっと話を戻しますが、すると大倭の紫陽花邑というのは、八紘一宇の顕現みたいな場になるわけですか。

法主 そうですね。八紘一宇というのは、いつも自分の気持ちの中にあつて、それが自然に、紫陽

花邑のような具体的な形になっていった、とも言えます。八紘一宇の思想にふさわしい一つの共同体を作らなきゃいけない、といった意図は最初からないんです。現実には、家族の中だけでも仲良くしていけない人たちがいるくらいだから、難しいですよ。

だけど私の考える八紘一宇というのは、一人一人の個性に基づいた生き方で動いていくことなんです。まあ、集団生活となれば、共通の大きな目的もあつていいんじゃないでしょうか。紫陽花邑では自分も他人もなく、皆仲良くいっただいだろう、というくらいの単純なものです。誰もがこの世の中に生れさせてもらい、自然に育まれて暮らして以上は。

ここは宗教関係だからといって、何時に起きて神さん拜んでこうしなきゃいけない、と規則を決めたり、押し付けるのは嫌ですね。私自身は朝起きたら雪隠で手を合わせて拜むだけです。感謝の祈りですけど。そういう自分にだけ通用するやり方を強制するのもおかしいですから。

ここでは毎月23日が月次祭で、昼から皆が集まって礼拝したり、宗教的な話し合いをする。ほかにお祭りが年二、三回あるだけです。決め付け言うたらそうかもしれないですけど、それ以外に宗教的な行事といったものはないですね。

人間一人一人の顔を見たら全部違うし、性格も違う。知力、体力、能力、そのほか全ての点で違う。バラバラの個性が集まり、自分はどう生きるんだ、と自覚してそれぞれに動いた場合、全体として調和している状態なんです。それが神ながら、自然の心です。誰にでもその人なりの良さがあり、また他人に嫌われる面もある。お互いの違いを認め合い、許し合つて、仲良くしていったらいいんじゃないでしょうか。(次号に続く)



『ターラ通信』 第11号 2020年10月より転載

2002年5月12〜20日

東北巡礼記

埼玉県飯能市

康米那

(※編集部宛に、坂田洋美さんの紹介で、「ヒマラヤ山岳民族の友」のニューズレター『ターラ通信』が送られてきました。その添え書きに「いつも『おおやまと』を興味深く読ませて頂いております。ずいぶん前ですが、そちらに伺ったこともあります」とあります。平成10年12月号本紙のあじさい日誌によると前月23日の月次祭の折、インド舞踊を奉納されたようです。

他に夢中になることがあつて、十数年、未完のままだった東北巡礼記を今回やっと書き上げられたとのこと。冒頭の法主さんの名前が登場する辺りを転載させて頂くことにしました。一部要約

すべては一なる源へ還るため

沖繩から始まった〈大いなる母〉の蘇りを願う旅、東北の巡礼先の候補として浮かんできたのは、縄文遺跡や環状列石、ピラミッド型の山や湖等、主に超古代のエネルギーを宿していると思われる聖地であった。

ところが、巡礼の初日、青森空港で私たち(韓国からの参加者ユンミさんと私)を迎えて下さった高橋延之・末子夫妻は、足早に縄文前期と後期の遺跡(大平山元遺跡と小牧野遺跡)を案内すると、一路、青森の西北、十三湖に向かわれた。

最初に辿りついたのは「和歌山」という民宿兼食堂。店に入って、この店の名物らしい蛸定食を注文するなり、「ここは数年前、矢追日聖さんが

来られた時に泊られた宿なんですよ」と懐かしそうに話されるのを聞いて、ようやくお二人が昼食をとらずにここまで一気に車を走らせられた訳が呑み込めてきた。

矢追日聖さんとは直接お目にかかったことは無いが、ここ10数年知り合った方たちが、ほとんど日聖さんと縁のある方たちだったので、彼らを通して日聖さんの人柄に触れるうちに、いつの間にか私の中で日聖さんに対する敬慕の念が深まっていた。

それだけでなく今回東北巡礼では、宿泊から道案内に至るまでほとんどすべて日聖さんとゆかりのある方々のお世話を受けることになったので、内心「もしかしたら奈良から東北に逃げのびた古代ヤマト民族、長曾根彦や安日彦にゆかりのある御霊たちが待っているかもしれない」という予感があった。とはいえ、今回の私たちの目的は大いなる母の聖地を巡るものなので、その古代ヤマト民族とどういふ繋がりを持つのか皆目見当がつかなかった。しかし蛸定食を食べ終る頃には「何も分からなくてもいいわ。日聖さんのお導きがあるならば……」という気持ちになっていた。

日聖さんは日本の敗戦後、奈良で〈大倭紫陽花邑〉を開かれ、宗教と言うより、日々の生き方を通してかんながらの道(＝古代ヤマト民族の自然に順応した生き方)を実践してこられた方だと聞いている。長曾根日子命とゆかり深い土地に生まれ、先祖からの伝承やご自身も歴史を調べるうち

ターラ通信

東北巡礼記 その2 第11号2020年10月



に、大和王朝の成立について、通説とは異なる独自の見解を持つようになられたようである。

それによると、九州から天孫族が東征してきた頃、奈良のこの土地には既に長曾根日子命を長とする平和で豊かな祭政一致のクニが存在していた。彼らの防戦力の前で九州からの天孫族が苦戦を強いられている時、奇しくも天啓が降り、その奇瑞を悟った長曾根日子王は、天孫族に和議を申し出、クニの主導権を譲り渡すことにした。

ところがそれに不満を抱く同族の反発を解消することができず長曾根日子王はついに、両部族が平和裏に和合し、神意に基づく新しいクニ(大和王朝)が生まれることを願って自害する。それにより第一代神武天皇の御代が開かれたというものである。

それが後世、日本の歴史では長曾根日子命を逆賊とみなし、一部は東北に逃げたというシナリオになっている。日聖さんは「天孫族によってつくられかえられた日本の歴史を見直すことによって、古代ヤマトの原住民(長曾根、物部一族)の荒ぶる魂を鎮めたい」という強い願いを持たれていたようなのだ。

和歌山という民宿を後にして向かったのは十三湖の歴史民俗資料館で、「よみがえる中世港湾都市―十三湊展」だった。日本海と繋がっている十三湖周辺には、鎌倉から室町時代にかけて、広く北方世界との貿易を通して発展した港湾都市があったという。それが突然(大津波または戦禍による壊滅?) 跡形もなく消えてしまったらしい。そ

れ以来600年近く幻の「十三湊」として語り継がれてきたが、近年行われた発掘調査により当時の遺跡が見つかり、それが大和朝廷に最後まで抵抗した夷(安日彦の末裔)、安藤(安東)一族によって築かれたことが明らかになり、地元民の郷土意識を一挙に高揚させることになったそうである。

資料館を後にして、十三湖の北端にそびえるピラミッド型をした露山に案内され、そのふもとからしばし日本海を見渡す。この山は東北の霊峰、岩木山と一直線につながっており、今でも岩木山神社と同じ日に祭りをやっているという。

その後、もとはアラハバキ神を祀っていたという洗磯崎神社や、その反対側にある三角山(やはりピラミッド型をしている)、縄文前期のオセドウ貝塚(長曽根彦の遺骸を埋葬した墓地とも言われている)に立ち寄り、この日の最終目的地、十三湖山王坊日吉神社に向かう。この神社ももとはアラハバキ神を祀っていたという。(以降略)

▼康米那さんのお便り 2020年12月

「東北巡礼記」の中から、法主さまの登場なさる部分だけを転載なさるのに異議はありません。その際、前文の「他に夢中になることがあって」というところ、具体的に私がどういうことに夢中になって10数年、日本のオモテの歴史から抹殺されたアラハバキ神(信仰)を追うようになったのかという点を入れて頂きたいのですが、よろしいでしょうか。

というのは、このことは東北巡礼後、私の中でふくらんでいた疑問に答えて下さる方がいらっしやらず、できれば日聖さんが生きておられたらお尋ねしたいと思ってきましたことなのです。この機会

にその疑問点を以下に記させて頂きますね。
1. 東北に逃げたとされるナガソネ彦・アビ彦兄弟は、自害されたナガソネヒコノミコト(王)とどういう関係(兄弟、子孫、親戚?)にあったのか。

2. 彼らが東北に逃げた理由は何だったのか? 和議を求めて国を譲られた王に対する反発からか、それとも九州からの天孫族と根本的に相容れないものを悟ったためか?

3. 東北でアラハバキ神を求心点に、五部族と連立王国を建て、その子孫が千年近くも大和朝廷への服従を拒み抵抗し続けた本当の理由は何なのか。

4. 奈良の大倭で祭政一致のクニを営んでいた時の、ナガソネ族の生き方(奇稲田姫命をご祭神とする?)と、東北でアラハバキ神を信奉して祭政一致のクニづくりを目ざしたアラハバキ族の生き方に違いはあるのか。もし違いがないとすれば、両部族の信奉していた神の実態は同じものだったのではないか?

▼康米那さんの第2信

(※編集部から康さんの疑問に対する参考として、津名道代さんの「日本原住民『国栖』の叢智と慈悲 矢追さんと司馬さん」を掲載した『おおよまと』平成10年2月号を送りました。

法主さんの帰幽後に、津名さんが「ナガソネヒコの頃の原ヤマトは何とあったのでしょうか」と尋ねたくて、生前の法主さまに会ったことがあること、またその折ためらいがあって聞かされたことでもあるという話を書かれています)

昨日、平成10年2月号を受け取りました。
津名道代さんが矢追日聖さんと司馬遼太郎さん

のことを、ともに日本の原住民「国栖」と捉えていらっしやるのがとても印象的でした。お二人とも九州から来た天孫族の末裔ではなく、ナガソネヒコの末裔だと思っていられませんか?

私は30年ほど前、ひよんなことから役の行者に魅かれ10年ほど吉野通いをしたことがありますが。その折吉野の原住民と言われる国栖の存在を知り、日本の天皇の存続(?)が危うくなった時(例えば神武さんや天武さんが即位する前)どういうわけか、原住民なのに、彼らを助ける側に回ったことに不思議な想いを持ったことがありま。それで国栖舞が奉納される浄見原神社を訪ねたり、国栖の末裔という方に会って面談したりしたこともあるんですよ。

それはさておき、(矢追さんと司馬さんという)お二人ついて、異なる民族、部族の政争のつぼの中で、屈折した敗者の痛み、重みを、玲瓏と熟成された「関西縄文人Ⅱ国栖(ナガソネヒコの末裔)」と、津名さんが表現されている点に非常に興味をひかれました。

そうですね、歴史は常に勝者と敗者の果てしないせめぎ合い、尽きせぬ苦しめ合い(支配・服従)の連続だったので、人類のほとんどは常に「やられた痛み」を背負って生きてきたのでしょうか。その痛みをいつまでも恨めしく受け止めるのではなく、お二人のように公明で、成熟した捉え方が出来るといいですね。(できれば私もそうありたいと願っています)

そういう意味で、大倭からの帰途、津名さんが生駒山をしみじみと仰ぎながら「この山だけが知っていることかもしれないナ、そうおもった」「お二人ともこの裾野でしばらく「神遊び」され、あの山に溶けてゆかれたようにおもえる……」という締めくくりがとても心に響きました。

追悼 杉浩史さんの手紙(大阪府茨木市)



令和2年11月14日、78歳で帰幽。
6月上旬に届いた手紙です。
「寸莎」平成20年5月号に登場。

その後、如何お過ごしでございましたか。当方「つつがなく……云々」と申し上げればイイのですが、実はそうもいかず、出だしの言葉選びで只今、逡巡(じゆん)しているトコロでございます。

取分け親しくさせていただいていた友人には現在、私の身の上に乗ってしまった事実について、既に明らかになりましたので、或いはお聞き及びの方もいらっしゃることかと思いますが、何とあるうことか、つい最近に判明したのですが、私にも遂に「ガン」という名の厄介な「病い」が取り付きよりまして、現在は難儀をしながら、闘病中であります。

コトの発端は、左足のお尻から太モモそして、脹脛(はらばき)にかけて筋肉痛のような「痛み」が発生し、ピッコを引き引きの歩行になっていたのですが、結果それが今回の「病い」の予兆でありました。後になって判ったことですが、それは肺臓に発生した小さな「ガン」が何と、脊椎の最下部に転移し、その転移したガンによる歩行障害だったのです。実を言いますと、ちよつと大袈裟な表現かも知、とも思いますが、今や「内臓」を取り巻く骨に「転移」しまくっている……といった状態になつておるらしいので……。ところが今のところ、ひと時に比べれば減りはしたものの、少しは「食欲」も戻り、一見は非常に元気です。私と同世代?の「樹木希林」さんが、先頃これに近い「ガン」で他界されましたが、どうやらそれに酷似した状

態かも知、とも思っています。彼女の言い分も、最初は「ホントかいナ!」という思いをいだきましたが、やはりホントだったんですナ……!!

さて、以上のようなことで、ある程度親しくお付き合ひのあった友人・知人に対して、いきなりの「訃報」というのも、「水臭い」と思われるかも知れず、それは当方「ココロヨシ」としませんので、こうして、事前のお知らせをば、させていただく……という仕儀で、実際にそのようにさせていただくこととしました。

で、先頃までは、大阪医科大学の付属病院入院中……。ここは私が中高生時代に学んだ「高槻中・高」と随分と縁の深い大学でありまして、現在の私の主治医も知らなかったんですが、私の(孫のような年齢の)後輩でありました。ここに至る経過も、私が日常的な掛り付けの内科医(を皮切り)↓整形外科医↓済生会茨木病院↓そして大阪医大病院という流れに乗った紹介から紹介で、辿り着いたワケでありまして、ネラつてこの病院に来たワケではありませんが……。結果的には、ご縁の深い病院に辿りついたことを、今は素直に喜んでおります。

ただ、私の病状は、身体を切り刻んでの「手術」には、今となつては必ずしも適さず、時間をかけて「投薬」中心での対処となる模様です。近々にどうこうする、といったことになるワケではなく、時間をかけての「病魔」と長い闘いになります。ま、この闘いに勝ち残れるかどうかはハッキリ言つて、非常に難しい……と考えています。何しろ私の場合、既に「ガン」の進捗状況は「レベル4」だとか……。だけど私に残された全エネルギーを傾注して、頑張ることをここで誓います。

次のご連絡が、①快癒になるか、それとも逆に②訃報となるか、(道中で)引き分けもあるか?

ですが、頑張ります。では、この辺で……。どうかお身体を大事に、そして大切に「ご自愛」をいただきますよう、願ひあげる次第であります。※この原稿を作成後に、更に茨木市内の病院へ転院になりましたので申し添えておきます。

おくる言葉

杉本順一

◆コロナのために入院見舞いに行けなくなった杉浩史君への手紙——
今日は6月15日、我がが(大倭)入門記念日。やつと手紙を書く気になった。

56年過ぎたのだが、私は苦労が少なかったのか、あつという間の気もする。

今は、何をしてきたかよりも、どんな心境で暮らせるかに、目的が変わつてきたように思う。

体は一度だけのものだろうけど、魂は、嫌でも転生する。自然にそう思える歳になってしまった。

杉浩史は一人、杉本順一も一人、これは惟神(かみかみ)お互い法主さんに言われた「時間を有効に」を、あらためてかみしめていくしかないか……。

それでは今から神宮に行つてきます。ポン

◆11月14日に帰幽した杉浩史君への伝言——
11月25日の朝5時過ぎ、ぼんやり目を覚ましかけた時のこと。「ポンよ、杉はきちんと生きよつたぞ」と法主さんのお言葉を感じた。

これを聞いて直ぐ思い出したのは、君が邑を離れてから後に、邑を訪れ瑞光院を訪ねた時、鈴月かあさんから言われたという、「浩ちゃん、あんたは大倭の子やでえ」の一言を、宝物のように喜んでいた君の顔だ。

「杉はきちんと生きよつたぞ」の法主さんのお言葉は、霊界からの勲章だね。

自分の心が霊界での自分の座を決めるといふ法主さんの教えを信じていこう。ポン

あじさい日誌

1月11日 朝9時半から西の斎庭で風もなく青空の下、「大とんど」神事。控え目な中にも恒例のぜんざいと焼き芋等。

1月14日 午前10時半から拝殿で大倭殖産(株)の関係事業グループである安全衛生協力会による安全祈願祭が行われました。

1月15日 大倭神宮月次祭。
1月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和42年1月23日の法話(本紙未掲載)でした。

1月27日 故見田暎子さんの帰幽2年祭にあたるこの日、追悼文集『旅するように生きて』が完成しました。

2月1日 午後、教務本庁に於いて、女性4人が玉緒祭の豆煎りをしました。

2月2日 玉緒祭。

この日お聞きしたのは昭和42年2月3日の玉緒祭の法話(本紙未掲載)でした。

2月6日 大倭神宮月次祭。
夜、大倭会館で邑倭の会。

【訃報】 令和2年12月8日、大倭とは昭和40年頃からのご縁の



川竹四郎さん(京都府八幡市)が帰幽されました。91歳。平成30年7月号の寸莎に登場。法主

さんに託されて、拝殿入口の「と戸糖加身恵見田芽と(古代文字の)ナモタカモノハラ」の木彫り、及び「大倭大本宮」の額を作成した方です。

大倭安宿苑では

先の見えない中、職員一同は感染予防に取り組む日々です。

(菅原園)

1月15日 車椅子清掃のボランティアさんが来られました。

1月24日 希望者でカラオケ。(須加宮寮)

1月12日 11名が食堂清掃。

1月21日 希望食事会。お寿司や中華等を近隣のお店に注文。

(長曾根寮)

1月13・14日(二・三)ご馳走、ビンゴゲーム、獅子舞踊り、職員・ボランティアさんの出し物等盛りだくさんで新年会。

2月2日(特養) 鬼のイラストに豆まきや巻きずし等で節分。

(茂毛路園)

1月8日 昼食時に創作料理(カニ鍋)で新年のお祝い。

(八重垣園)

1月14日 午後、食堂で、お抹茶と花びら餅で初釜を開催。

ごだまごだま

1月号について

▼滋賀県大津市 樋口寛美

(※樋口さんも鶴見ゼミの「40歳記念コンパ」の写真に写っていたので…)『おおよまと』お送り頂きありがとうございます。24歳の

柴地君、「アジア主義と大東亜共栄圏理念」が、日本人の古代から持ち続けた自然観に基づくとは、さすがでした。「日本の深層」など自分の適当な解釈に恥じ入るばかりです。鶴見先生の「科学信仰からの脱却」で、

日本神道を非科学的と決めつける流れがあるが、「理想を作る」ことが科学にはできない。には同感できました。「アジアの国は全部家族」の感覚は、直感的に私の中にあることも気付かされた。ただ映画監督の今井

正の、人の気持ちの方が分かりすぎて煩わしいの実感はありませんが、猫の目、犬の目で見ることが

できるなどは宮沢賢治の視点と同じとも学びました。日本人にはそういう心の動きの伝統があったのに、明治以降、近代文明を押し付ける中で怪しくな

った。今日作られる明治維新の大河ドラマなどに、危ない綱渡りの日本の姿を見てしまいます。

▼北海道小樽市 守谷明宏

1月号「神通力如是」の三人の会の説明、多分の私の意見への回答なんですよけれど、やっぱりストンと心に収まらない。体にウイルスが入りこむと、細胞は戦って排除しようとする。けれども結局抗体を作って、その後入り込んで素直に受け入れて、発熱とかも起こさないで仲良く体の中にある。そんなことと同じじゃないかとも思っ

たりしたわけですが。これも「体の中の宇宙の動き」とすれば、トミ族とタカチホ族が戦ったのも「体の外の宇宙(神)の動き」なのでしょか。

ただ、台風やコロナなどでたくさん人が亡くなることには、理解できるものがあります。

例えば大きな蟻の巣があり、巣の中は蟻たちのコロニーとして毎日生きて、あるいは寿命がきて死んでいく。ある時、豪雨で蟻の巣は奥の方まで水浸しになり、多くの蟻が死ぬとしても、地球全体から見るとそういう時季だったのかも知れない。いま

コロナで右往左往している私たちの存在は、ひよっとしたらこの蟻たちなのかも知れない。そんなことを考えたりします。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
3月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
3月14日(日) 中止とします。

*月次祭(大倭神宮)
3月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)
3月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*ボランティアグループ「あじさいの箱」懇親会は中止します。

美甘通信

岡山県真庭市 湯浅芳郎

岡山県北は今日も雪です。今年には結構雪が多く時には50センチも積りました。

我家では毎月6日、15日、23日と3回のお祈りをしています。我家の守護霊は神倭加茂津

女命カムヤマト カモツヒメご様です。23日には鯛をお供えしお姫さんが岡山より一飛びで大倭にお持ちします。

集うのは母上・田中一二三、小生と妻・晴子、山崎基央君、江田鋭子さんです。床の掛軸「現身はよくつるとも永遠に結ぶ心のかわるものかは」は法王様の歌(万葉仮名)、揮毫は森下翠石(新蔵)さんです。

コロナ禍で大変、難しい時代です。奈良へなかなかいけない状況、ますますお祈りに力が入ります。

〈最近詠〉

枯野人声をかけてもいいですか
2021.1.28

